

謝朓と敬亭山

——祈雨詩群を中心に——

敬亭山は安徽省宣城市の北部に位置し、海拔は最高点で三二四メートルである。地質学的見地からして特筆される高さではないが、「江南の詩山」⁽¹⁾の異称の通り、唐代以降、のべ一四〇〇篇の詩文に言及⁽²⁾されて世に知られてきた。ことほどさように、詩の主題や典故として愛好されたのである。

敬亭山の名を高からしめたのが謝朓の詩であることは周知の事実であろう。『文選』に採られた「遊敬亭山」(『文選』の題は「敬亭山詩」だが、本稿では別集の「遊敬亭山」の表記で統一)をはじめとする詩五首が現存する。謝朓の敬亭山詩群については、謝朓の山水趣味や、唐詩における受容の観点からの検討が進められてきたが、本稿では公人としての謝朓が見た敬亭山、という視点⁽³⁾からの考察を試みたい。敬亭山にまつわる謝朓の詩六首の詩題は順に「往敬亭路中(聯句)」「遊敬亭山」「祀敬亭山廟」「祀敬亭山

宋

吟

春雨(聯句)」「賽敬亭山廟喜雨」であり、うち三首が公式の神廟参拝を題材としている。当然ながら、雨乞いは謝朓の私事ではなく、宣城郡が早魃の危機に直面していたが故に為された措置である。公務を詩に表現することが謝朓にとっていかなる意味を持ち、そうした営みによってどのような詩作が生み出されたのかを分析してゆく。

一 謝朓の喜雨詩

謝朓にとつての敬亭山を考えるにあたり、まずは敬亭山が位置する宣城郡を謝朓が訪れた経緯と、この土地に関する彼の認識を確認しておきたい。南齊明帝の建武二年(四九五)、謝朓は中書郎から宣城太守の任に就いた。地方官への転出は一見すると左遷のように思われるが、南朝士大夫の昇進経路からして、中書郎から

太守という人事は吏部郎就任への道筋の一環であり、むしろ昇進への布石だと言⁴⁾う。とはいえ、宣城赴任が謝朓の意に染まないものであったことは確かだ。「躬^みを勅^いめて毎に踟躕^{ちうとく}し／恩を瞻^みて惟だ震蕩す（勅躬每踟躕 瞻恩惟震蕩）」（京路夜発）と恩寵への感謝を詩に述べつつも、すぐに「行かん 路の長きに倦むも／帰軼を税^とくに由無し（行矣倦路長 無由税歸軼）」というくたびれた気持ち⁵⁾を吐露してもいる。このような謝朓の低徊は、つとに指摘されているように同時期の政局の混乱に起因する。建武二年頃の謝朓は、庇護者であった竟陵王（蕭子良）と隨郡王（蕭子隆）を相次いで喪い、かつて文学サロンを共にしていた王融や任昉の末路も目の当たりにしていた⁶⁾。政治情勢の急激な悪化が、この時期の謝朓の詩に影を落としていた。ただ、謝朓は宣城への赴任を隠逸や自然賞美の恰好の機会とも捉えており、「羣塵 茲^{こゝ}自り隔たり／賞心 此に於いて遇わん／既に懷禄の情を懼はしめ／復た滄洲の趣に協う（羣塵自茲隔 賞心於此遇 既懼懷禄情 復協滄洲趣）」（之宣城郡出新林浦向板橋）とも、「江海 未だ従わざると雖も／山林 此に於いて始めん（江海雖未従 山林於此始）」（始之宣城郡）とも述べている。本稿の趣旨からして重要なのは、政局に由来する憂慮や不遇感、地方の自然に囲まれての安らかな隠遁的境界といった、多面的な謝朓の姿を詩に浮かび上がらせる時空と

して、宣城郡が定位されていたということである。宣城時代の詩には清冽な叙景と、公務の合間に生じる思いの共起するものが少なくない。宣城郡は、この地をあずかる太守・謝朓の、出処進退にわたる体験・情緒・想念を詩に表出させる舞台であったのである。

そうして、宣城郡を代表する景勝地の敬亭山もまた、謝朓の複線的な自己認識を詩に射影する一つの場となった。前述の通り、謝朓は祈雨のために山廟に参詣したことが詩の題によつて徴される。「祀敬亭山春雨（聯句）」は雨乞いの儀を執り行う際のもものと見られ、「賽敬亭山廟喜雨詩」に言う「賽」は祈禱の結果、後日に雨が降ったことを感謝するための儀式である。太守の謝朓自らによる祈雨の儀の挙行は、建武二年から三年にかけての日照りによるものと考えられる。『南齊書』卷十九・志十一・五行に「建武二年、大いに旱る」とある通り、謝朓が宣城郡に着任した年は、全国的な大旱魃の真っ只中⁷⁾にあった。旱魃に際して太守に祈雨の義務のあることは、既に後漢の頃に明文化されていた。『後漢書』卷九五・志五・礼儀には左のように記されている。

自立春至立夏尽立秋、郡国上雨沢。若少、（府）郡県各掃除社稷。

立春より立夏に至り立秋に尽きる、郡国 雨沢を上^あぐ。

若し少なければ、（府）郡県各おの社稷を掃除す。

また、『後漢書』戴封伝には祈雨の逸話が載録されており、郡県の長官による祈雨が実際に行なわれていたことを裏書きする。

其年大旱、封禱請無獲。乃積薪坐其上以自焚。火起而大雨暴至。

於是遠近嘆服。

其の年大いに旱り、封禱請するも獲る無し。乃ち薪を積み其の上に坐して以て自らを焚さんとす。火起りて大雨暴かに至る。是に於いて遠近嘆服す。

通常の祈雨の効き目がなかったために、戴封は自らを燃やす挙に出、大雨が降ったと言う。さらにくだって東晋では、下邳内史の任にあつた曹毗が、現地の日照りに臨んで請雨の文を神に捧げているが、恐らくは太守のための代作であろう（『藝文類聚』卷百・災異部・祈雨）。農作物の順調な生育に不可欠である降水量は、地方官が責任を持つべき死活問題であつたのである。⁽⁸⁾

謝朓の祈雨に天が感応してか、宣城郡には雨が降つたようで、前述のごとく謝朓は返礼として「賽」を執り行つた。その情景は「賽敬亭山廟喜雨」に描かれている。

- 1 夕帳懷椒糈 夕べに帳して 椒糈を懷き
- 2 蠲景潔瘳鄉 景を蠲めて 瘳鄉を潔くす
- 3 登秋雖未獻 登秋 未だ獻せざると雖も
- 4 望歲佇年祥 望歲 年り祥きを佇つ

5 潭淵深可厲 潭き淵 深きは可く厲しからん

6 狹邪車未方 狹き邪 車未だ方はず

7 蒙籠度絶限 蒙籠として絶限度り

8 出没見林堂 出没として林堂見る

9 秉玉朝群帝 玉を秉りて群帝に朝し

10 樽桂迎東皇 桂を樽んじて東皇を迎う

11 排雲接虬蓋 雲を排して虬蓋は接り

12 蔽日下霓裳 日を蔽いて霓裳は下る

13 会舞紛瑤席 会舞 瑤席を紛せしめ

14 安歌繞鳳梁 安歌 鳳梁を繞る

15 百味芬綺帳 百味 綺帳に芬わしく

16 四座沾羽觴 四座 羽觴に沾う

17 福被延氓沢 福被りて氓沢を延べ

18 樂極思故鄉 樂しみ極まりて故郷を思う

19 登山眺帰望 登山して帰望を眺すれば

20 原雨晦茫茫 原雨 晦として茫茫たり

21 胡寧味千里 胡寧んぞ千里を味して

22 解佩拂山莊 佩を解きて山莊に拂らん

賽を夕暮れ時の敬亭山で挙行する経緯（1〜8）、賽の儀式の過程（9〜16）、述懐（17〜22）という三段に分けられる。諸注に指

摘されている通り、第一・二段では『楚辞』を中心に『詩經』『礼記』などの由緒ある言葉が多用されて、神聖な雰囲気醸し出されている。ここでは『楚辞』由来の語を確認するに留めるが、1の香物と精米を指す「椒糝」は「巫咸將に夕べに降らんとす、椒糝を懐きて之を要す（巫咸將夕降兮 懷椒糝而要之）」（『離騷』）に、神を迎える所作の一つである10の「桂躑」は「蕙肴を蒸め蘭を藉き、桂酒と椒漿とを奠す（蕙肴蒸兮蘭藉 奠桂酒兮椒漿）」（『九歌・東皇太一』）に、神仙の衣を意味する12「霓裳」は「青雲の衣 白霓の裳、長矢を挙げて天狼を射る（青雲衣兮白霓裳 举長矢兮射天狼）」（『九歌・東君』）に、そして演舞を言う13「公舞」も「翺飛して翠曾し、詩を展べて会舞す（翺飛兮翠曾 展詩兮会舞）」（『九歌・東君』）による。これらの語はいずれも謝朓以前の詩の用例が少なく、単語の選択の面からして同作の独特さがうかがわれる。

ただ、「離騷」「九歌」の語が散見するとはいえず、「賽敬亭山廟喜雨詩」が『楚辞』的な悲哀のイメージに収斂されているというのではない。詩の主眼は建武三年の降雨を言祝ぐことであり、作中に描かれている宴は神を迎えての華やかなものとなっている。そして神の恩恵への感謝は、楽しみ極まって悲しみ来たるの諺のごとく、望郷・隠逸の念に切り替わり、詩は感傷的な情調のうちに締めくくられる。本質的には、宴集の詩の構成に沿ったものだ

と言える。

「賽敬亭山廟喜雨」には、作者である謝朓の責務を果たした達成感と、責務の緊張が緩んだ結果、胸中に去来した悲哀が表出されている。太守として宣城にあることの心境が、「賽」という公的行事の記録とともに、詩に刻印されているのである。この官人生活の記録が、「賽敬亭山廟喜雨」という詩の形を取っていること、文学史的意義については、なお二つの点から検討する余地がある。

第一に、そもそのところ、「賽」を詩に表現する試みが従来の際には、祭文で謝意を伝えるのが一般的であった。謝朓とともに竟陵八友の一人であった陸倕「請雨賽蔣王文」（『藝文類聚』卷百・災異部・祈雨）や、任孝恭「賽鍾山蔣帝文」（同）がそれである。ここでは陸倕の文を参考まで引用しよう。

陸周祚胤、鍾嶽降精。聰明正直、得一居貞。無方無体、不疾不行。化馳九鼎、位冠百靈。東掩屢愆、西郊已戢。偶龍矯首、泥人鶴立。神聽孔殷、靈応揮霍。儻睹翻伊、俄聞倒洛。葉周神畢、恩洽酒闌。靈談抗袖、鬼笑投拌。惟茲具引、於万斯懼。陸の周に胤を祚いし、鍾の嶽に精を降す。聰明正直、一を得て貞しきに居す。無方にして無体、不疾にして不行。化 九鼎に馳せ、位 百靈に冠す。東掩 屢しば愆れど

も、西郊 已に戢まれり。偶龍 矯り首み、泥人 鶴の
ことく立つ。神聰は孔た殷んにして、靈応は揮霍す。儼
ち伊の翻るを暗、俄に洛の倒なるを聞く。衆周きて神畢
き、恩洽くして酒闌けん。靈談じて袖を抗げ、鬼笑いて
拵つるを投ぐ。惟れ茲に具に引く、万斯の懼びに於いて
せん。

「蔣王」は首都・建康近郊の鍾山に祀られた蔣歆を指す。蔣歆は後漢の人とされ、賊軍討伐の最中に陣没し、彼を哀れんだ民衆によつて鍾山に蔣侯祠が立てられたと言う。『搜神記』に採られた伝承によると、蔣歆は東晋と前秦の淝水の戦いで東晋軍に加護を与えたと伝わる。彼は『宋書』『南齊書』にも言及されており、南朝を通じて尊崇されていたと思しい。

陸倕の文では、蔣歆の強大な靈威に対する賛美に多くの句が割かれ、末六句に宴の情景と降雨の喜びが提示されている。このような神への礼賛を主眼とした文章の構成が、祭文にまま見えることとは言うまでもない。祭文に書かれるべきは神に対する訴えかけであった。恐らく、謝朓も祭文を敬亭山の神に捧げたのであろうが、その他に「賽敬亭山廟喜雨」という詩も賦した。このことから、彼が祭文の形式で伝えることのできないもの、つまりは彼自身の主体的な思いを表したかったと考えられるのである。

第二に注意されるのは、謝朓詩と従来の喜雨の詩との相違である。喜雨の詩は曹植「喜雨」（『藝文類聚』巻二・天部下・雨）を濫觴とするもので、矢嶋美都子氏の論に指摘されたように、描かれる内容には一定のパターン、すなわち、天恵への感謝・降雨の様子・豊作の予感がある。早天の慈雨によつて大地が潤うことを言祝ぎ、万民を代表して喜びを表現するのが喜雨の詩の常套であった。曹植詩を例示しておく。

- 1 天覆何彌広 天の覆うこと 何ぞ彌広なるや
- 2 苞育此群生 此の群生を苞育す
- 3 棄之必憔悴 之を棄つれば必ず憔悴し
- 4 恵之則滋榮 之を恵めば則ち滋榮す
- 5 慶雲従北来 慶雲 北より来たり
- 6 鬱述西南征 鬱述として西南に征く
- 7 時雨中夜降 時雨 中夜に降り
- 8 長雷周我庭 長雷 我が庭を周る
- 9 嘉種盈膏壤 嘉種 膏壤に盈ち
- 10 登秋必有成 登秋 必ず成る有らん

雨に潤う天下と豊作の予感が点綴されており、天下という普遍的な視点から降雨の喜びが表現されている。曹植詩から謝朓詩までの間に作られた喜雨の詩で現存する謝惠連・謝莊・鮑照の作も、

やはり曹植詩と同様にの視点から雨を喜ぶ内容となつて¹¹⁾いる。

このように見ると、謝朓「賽敬亭山廟喜雨」は、神の靈驗に謝する祭文、喜雨の詩という二つの文章の伝統に連なりながらも、しかしそれらの範疇に含まれない個人的な抒情が導入されている。かかる個人的な抒情を支えているものこそ、宴の文学の系譜に則つた表現である。再び、「賽敬亭山廟喜雨」から関連箇所を抜粋しよう。

- 11 排雲接虬蓋 雲を排して虬蓋は接り
 12 蔽日下霓裳 日を蔽いて霓裳は下る
 13 会舞紛瑤席 会舞 瑤席を紛せしめ
 14 安歌繞鳳梁 安歌 鳳梁を繞る
 15 百味芬綺帳 百味 綺帳に芬わしく
 16 四座沾羽觴 四座 羽觴に沾う
 17 福被延氓沢 福被りて氓沢を延べ
 18 樂極思故郷 樂極まりて故郷を思う
 19 登山聘帰望 登山して帰望を聘すれば
 20 原雨晦茫茫 原雨 晦として茫茫たり
 21 胡寧味千里 胡寧んぞ千里を味して
 22 解佩拂山莊 佩を解きて山莊に拂らん

謝恩の宴席に民の幸福に安堵する一方で、極まる楽しみに郷愁

が惹起されると言う。歡喜から悲哀への転調を担う18が、漢の武帝「秋風辞」の「簫鼓鳴りて棹歌を発す、歡樂極まりて哀情多し（簫鼓鳴兮発棹歌 歡樂極兮哀情多）」に淵源する、宴の文学の典型的な表現に基づくものであるのは容易に察せられる¹²⁾。悲哀は宴という状況から自然に導かれ得る情緒の一つなのであり、しかも謝朓詩において望郷という個人的であると同時に普遍的な形を取っている点で、太守の地位にある者の私情として披瀝されるにふさわしい。

つまり謝朓以前に蓄積された文章の伝統から見ても、文学の材料としての宴には、悲しみ（望郷）と公的行事に付随する集団の喜びを、一篇の詩に破綻なく結合させる可能性が内在していたということになる。この可能性は、神事・宴・喜雨に関わる先行表現の組み替えによって、「賽敬亭山廟喜雨」という具体的な表れとなった。喜雨詩は、帝都の官人が天下の慶事を言祝ぐのではなく、地方官が任地の危急が救われたことを喜ぶと同時にわだかまる郷愁を再確認するためのよすがに定位されたのである。

「賽敬亭山廟喜雨」のみならず、神を祀る情景を題材にした「祀敬亭山廟」「祀敬亭山春雨（聯句）」も先例を見ないことについて付言しておく。祭文（請雨・賽）や喜雨の詩の系譜に則るだけでは表現しきれない太守の体験が複数の詩に織り込まれているので

ある。そういった謝朓詩の影響のもと、神を祭るという事柄は後代の詩の題材となっていた。梁に降れば陽慎「從駕祀麓山廟」、簡文帝「和蕭東陽祀七里廟」「漢高廟賽神」があり、唐代以降も陳子昂「題祀山烽樹贈喬十二侍御」、王維「涼州賽神」などがある。詩の主題の開拓という文学史的意義が「賽敬亭山廟喜雨」に認められるのである。

題材の発見から、謝朓と敬亭山という位相に話を戻してみれば、つとに先学指摘されている通り、敬亭山は、民生に関わる宣城郡の故事を含蓄する土地となった¹³。その端的な事例に王維「送宇文太守赴宣城」の「時に敬亭の神に賽し／復た罍師の網を解く（時賽敬亭神 復解罍師網）」が数えられ、この一聯は宣城に赴く太守・宇文某の、統治に鞠躬如たる未来像を、謝朓になぞらえて言祝いだものである。以上を要するに、従来の文章の脈絡が再統合された「賽敬亭山廟喜雨」は、官吏としての謝朓像と敬亭山を、一つの典故として後代に認知させた作品だと評されるのである。

二 「遊敬亭山」——敬亭山に即して表れる謝朓の自己認識

官人的側面に根ざす参詣の様相を描いた詩群に次いで、敬亭山の自然美を描いた作に目を向けてみよう。本論の冒頭でふれた通り、敬亭山の叙景が織りなされた謝朓の代表作には「遊敬亭山」

があり、この詩は後代における敬亭山の詩的イメージの源泉という文学史的意義を有している。この詩の表現が謝朓の実人生と関連しつつ生み出されたものであることに目を向けたい。「賽敬亭山廟喜雨」が儀式という官人生活の一齣から発して、太守の抑えがたい郷愁に着地したように、「遊敬亭山」も景觀描写から作者の自己認識へと至りつく。前節に引き続き、謝朓の境遇と表現の関係に焦点を絞って作品分析を行う。まずは本文を掲げる。

- | | |
|----------|---------------|
| 1 茲山亘百里 | 茲の山 百里に亘り |
| 2 合沓与雲齊 | 合沓として雲と齊し |
| 3 隱淪既已託 | 隱淪既已に託り |
| 4 靈異俱然棲 | 靈異 俱然として棲む |
| 5 上千蔽白日 | 上は干して白日を蔽い |
| 6 下屬帶廻谿 | 下は屬なりて廻谿を帶らす |
| 7 交藤荒且蔓 | 交われる藤は荒れて且つ蔓り |
| 8 樛枝聳復低 | 樛れる枝は聳えて復た低る |
| 9 獨鶴方朝唳 | 獨鶴 方に朝に唳き |
| 10 飢颺此夜啼 | 飢颺 此の夜に啼く |
| 11 溼雲已漫漫 | 溼雲は已に漫漫として |
| 12 夕雨亦淒淒 | 夕雨も亦た淒淒たり |
| 13 我行雖紆組 | 我が行は組を紆うと |

14 兼得尋幽蹊 兼ねて幽蹊を尋ぬるを得たり

15 縁源殊未極 源を縁たずねて殊に未だ極めざるに

16 帰徑首如迷 帰徑 首かちくして迷うが如し

17 要欲追奇趣 要かちず奇趣を追わんと欲し

18 即此陵丹梯 此に即きて丹梯のぼに陵らん

19 皇恩竟已矣 皇恩は竟に已んぬるかな

20 茲理庶無睽 茲の理 庶わがわくは睽そむく無からん

この詩に描かれている敬亭山は、神仙が住まうのにかにも似つかわしい幽邃さに包まれている。遮られる日の光、延々と続く溪流、鬱蒼と生い茂る蒿類、朝夕に鳴く動物、そして視界を遮る雲と雨というように、敬亭山は方角すら見失わせるほどの奥深さを呈している。詩の描写による限りで、17 18に言われている通り、まだ見知っていない山中の風景を追い求めたいという好奇心を掻き立てるものであった。特に「陵丹梯」は、李善注に指摘されている通り、隋王に随従していた時期の作である「隋王鼓吹曲十首」其九・登山曲の「暮春 春服は美にして／駕を遊ばして丹梯に陵る／嶠を昇らば既に魯を小とし／巒に登らば且つは齊を懐かしむ（暮春春服美 遊駕陵丹梯 昇嶠既小魯 登巒且懐齊）」にも見える語であり、自然美に感動し、その美を体感し尽くそうという心情を表す身体行為を意味している。

同作は、太守として敬亭山を訪れ、合わせて幽山深谷も尋ね得たという13 14に示されているように、仕を相対化する謝朓の思考の表れであると同時に、謝朓が登山の体験をいかなる視点から受け止めているのかを物語っている。前節で述べたごとく、敬亭山と謝朓は、まず折雨という公務を関係の基点とした。折雨・神山という謝朓を取り巻く状況の三要素が、公務の責を背負った登山の途上に見出される自然美との価値判断の前提となり、さらには奥深い雰囲気を醸成する叙景の描出を規定づけている¹⁹。精神の慰藉を敬亭山に見出すまでの過程を語ったものが「遊敬亭山」なのである。

ここで注意を要するのは、在官の志を隠逸の志が超克するのではなく、前者によって後者が成り立つという相補的なものだという点である。末聯の「皇恩竟已矣 茲理庶無睽」は、望まぬ地方官になったという事態を批判的に捉えているわけではない。皇恩が尽きてしまったという他律的な事象に語りなされており、つまりいつの間にか逢着した境遇に導かれ、いざなわれて、山水憧憬へと心が向かう過程が述べられている。仕官の志と自然の美の並存は、宣城郡に至る途上に作られた「之宣城郡出新林浦向板橋」の「既に懷祿の情を慳かしめ／復た滄洲の趣に協あう（既慳懷祿情 復協滄洲趣）」と照応する一面を有する。もとより両作の間に謝朓

の認識の微妙な変化が示されているのも忘れてはなるまい。「宣城郡出新林浦向板橋」では仕と隠の双方を両立させる樂觀的な態度が顕著であるのに対し、「遊敬亭山」では仕に対する達観が露わになっている。公と私という対比される二項は同じでも、対比のあり方には変化が生じている。着任直前まではあくまで悲哀を抑制するために言われていた山水趣味は、敬亭山という場によって現実化されるに至ったのである。

謝朓の敬亭山詩群は、県政の記録であると同時に、職務をこなすうちに、はからずも愉悅を得た心の記録でもある。地方官への転出は、左遷であるかどうかの別を問わず、転出する側にとつては不本意な事態であろう。首都で培ってきた人間関係から退出することを強制するものだからである。孤独を惹起させる状況に適應するまでの過程は、やはり詩文に表出されることで、一つの区切りとなるのである。そうして謝朓は、敬亭山のみならず、宣城郡の山水を跋涉して得た感覚を「游山」（『謝宣城集』卷三）で次のように総括している。

経目惜所遇 目を経ては遇う所を惜しむ

前路欣方踐 路に前みては方に踐むを欣ぶ

目に入るもの全てが素晴らしい。宣城太守を務めた期間は一年程度の短いものであったが、謝朓は同族の先達・謝靈運の境地に

至りつくことができたようである。

注(1) 張才良主編、趙子文・李祖鑫『李白安徵詩文校箋』（安徽文藝出版社、一九九二）六三頁。

(2) 蕭夢龍主編『江南勝迹』（江蘇科學出版社、一九九三）の統計による。注1・2の文献は植木久行「江南の詩山・敬亭山考——山の発見と憧憬と」（『中国古典研究』五八、二〇一六）によって知った。

(3) 松浦友久「李白における謝朓の像——白露垂珠滴秋月」（『李白研究——抒情の構造』三省堂、一九七六／初出一九六五、寺尾剛「李白における宣城の意義——『詩的古跡』の定着をめぐって」（『中国詩文論叢』一三、一九九四）は、いずれも受容の面に考察の焦点が絞られている。そういった先行研究の潮流のなかで、石碩「敬亭山の印象——謝朓から李白へ」（『謝朓詩の研究——その受容と展開』研文出版、二〇一九／初出二〇一八）は、敬亭山詩群の表現についても考察を試み、謝朓と謝靈運の影響関係を論じている。

(4) 佐藤正光「宣城時代の謝朓」（『南朝の門閥貴族と文学』汲古書院、一九九七／初出一九九九）。

(5) 『文選』所収作は胡刻本を、それ以外の作品は四部叢刊本『謝宣城集』を底本とした。また、本稿で引用する本文の用字は常用漢字を基準とするが、適宜正字のままにした箇所もある。

(6) 石碩「詩人「謝宣城」の誕生——謝朓詩における荊州と宣城」（注3所掲石著、初出二〇一一）の実証による。

(7) 『南齊書』卷九・志一・礼によれば、建武二年、雨乞いのための雪祭を明堂で挙行することの当否が朝廷で議論され、実施す

ることが決定された。早害の深刻さの程がうかがわれる。

建武二年早、有司議霽祭依明堂。祠部郎何休之議曰、「周礼
司巫云、「若国大旱、則帥巫而舞雩」……（中略）……」。
従之。

(8) 「祀敬亭山春雨」の題の通り、謝朓が着任の翌年の春に祈雨の儀式を挙行した理由について私見を示しておく。日照りが深刻であるならば、着任後、間もなく祈禱するべきかと思われるのだが、どうやら慣習上、立秋以降に雨の祈禱はしなかつたようである。魏の魚豢『典略』(『太平御覽』卷十一・天部十一・祈雨)の逸文に「四月立夏早、乃求雨、立秋雖旱不禱。求雨到七月畢、賽之」とあるのが傍証となろう。謝朓は着任後に祈禱をする余裕がないままに立秋を迎えたため、翌年の春に挙行することになったとも想定される。

(9) 曹融南校注『謝宣城集校注』(上海古籍出版社、一九九一)、森野繁夫『謝宣城詩集』(白帝社、一九九一)など。

(10) 矢嶋美都子「豊作を言祝ぐ詩——「喜雨」詩から「喜雪」詩へ」(『日本中国学会報』四九、一九九七)。精確には、「天(天子)の徳を称える表現」「雨が降る予兆」「雨が降っている様子」「秋には良い穀物が収穫されるだろうという五穀豊穣を言祝ぐ表現」と細分化して記述されている。

(11) 鮑照「喜雨詩 奉勅作」(『鮑氏集』卷六)の本文を例示しておく。曹植詩より修辭的に洗練されているが、天下に雨が満ち渡る情景への祝福という趣旨は軌を一にする。

晉社蓬群陰 屯雲揜積陽 河井起龍蒸 日魄斂遊光
族雲飛泉室 震風沈羽鄉 昇雰浹地維 傾潤瀉天潢
平灑周海岳 曲瀆溢川莊 驚雷鳴桂渚 回溜流玉堂

珍木抽翠条 炎卉濯朱芳 閔市欣九賦 京廩開万箱
無謝堯為君 何用知柏皇

(12) 川合康三「うたげのうた」(『中国のアルバ——系譜の詩学』汲古書院、二〇〇三/初出一九九二)を参照。

(13) 注3所掲石論文。

(14) 注2所掲植木論文には「彼はどうして敬亭山の存在とその魅力に気づいて、それを初めて詩に詠むことになったのであろうか。おそらくそれは、敬亭山が宣城郡を守る鎮護の山であり……(中略)……参詣が、宣城郡太守のなすべき職務の一種であったからではなからうか」と推察されている。